5 月 20 日（日）13:50 － 14:30（川内南キャンパス　文科系総合講義棟　202 法学部第 1 講義室）

デモクラート美術家協会時代の泉茂について
――フェルナン・レジェの影響を中心に――

乾　健一（大阪大学）

泉茂（1922-1995）は、1951年に瑛九（1911-1960）らとともにデモクラート美術家協会（以下、デモクラート）を結成した。埼玉に暮らした瑛九に対して、泉は大阪における主要メンバーであったが、1957年に泉が第1回東京国際版画ビエンナーレにおいて新人奨励賞を受賞したのを機に、同年デモクラートは解散することとなった。泉は1959年に渡米、その後渡仏し、1968年に帰国後も旺盛な創作活動を継続した。没後、和歌山県立近代美術館など関西の美術館で泉茂の回顧展が度々開催されてきたが、いずれも作品の年譜的な紹介にとどまり、造形上の特徴や思想的背景についての分析はほとんど行われてこなかった。大阪のデモクラートをリードした泉だが、その活動の意義を問い直すことは課題として積み残されてきたと言える。本発表では、デモクラート時代における美術作品や創作に対する泉の価値観を示す出来事として、フェルナン・レジェ（1881-1955）をめぐる論争を取り上げるとともに、外国美術の影響という観点から作品を論じることで、研究が進んでいない泉茂の芸術の理解と戦後美術史における位置を再検証する足掛かりとしたい。

レジェは20世紀初頭にキュビスムの画家として頭角を現し、1930年代以降は壁画や舞台芸術など幅広い芸術分野を手がけていた。1955年4月、日本橋高島屋で「ル・コルビュジエ　レジェ　ペリアン　3人展」が開催されたが、このとき出品されたレジェの作品について、『美術批評』誌上の対談で針生一郎（1925-2010）ら4人の美術評論家たちが「小市民的」「オプティミズムの感覚」と評し、批判的な見解を述べた。これに対して泉とデモクラート会員の船井裕（1932-2010）は同誌の読者投稿欄において「レジェのオプティミズム」を擁護する反論を試み、瑛九ら他の会員たちも賛意を示した。泉たちの反論の背景にはデモクラートを支援していた評論家兼コレクターの久保貞次郎（1909-1996）の存在があった。久保は当時レジェをはじめとする西洋近代絵画を所蔵し、栃木県真岡の自邸にデモクラート会員を招いて自らの所蔵品を鑑賞する機会を与えていた。久保はレジェのことを「未来を向いた画家」と記しており、この評価が泉らデモクラート会員の間でも共有されていたと考えられる。

同年11月のタケミヤ画廊での泉の個展には、1950年代に隆盛した社会派・ルポルタージュ系とは一線を画す内容の作品が出品されており、個展を訪れた針生は、泉の作品の明快な色調と奔放な幻想にレジェの影響を見て取ったのだった。同展出品作を分析することで、泉がレジェの作品からどのような影響を受けていたのかを検討する。また同時期の泉の作品には、シュールレアリスムの画家マックス・エルンスト（1891-1976）やメキシコ近代美術からの影響も見受けられる。レジェをはじめとする外国美術は、デモクラート時代の泉の作品を特徴づける重要な要素の一つだったのである。